心理療法からみる現代の危機

横山　博

「心理療法」がテーマのひとつに挙がっています。この心理療法というのはいったい何なのだろうかということは、考えてみるとものすごく難しいことです。しかし、現実に日々クライアントさんと向かい合って心理療法を行っているという営みは、常にこの問いに何らかの答えを出していかなければならないということを意味しています。それにはもちろん答えは出さないという選択肢も含まれているわけですけれども。そういう非常に難しい問題を、去年までの学術フロンティア共同研究プロジェクトのなかでわれわれは考えてきました。

昨年の七月に、「言葉／イメージ／宗教性」という三つの切り口で心理療法をとらえてみようというシンポジウムを開催しました。またシンポジウムに向けての研究会も数回行いました。心理療法のシンポジウムには、実に七〇〇名以上の方々にお集まりいただきました。われわれの研究を認めてくださった方々が多くあったということを嬉しく思ったのと同時に、一方で、これは尋常ならざる事態だということを感じざるを得ませんでした。私が精神科医になって、心理療法をやろうと思ったのは三〇年前でしたが、当時は心理療法をやるというと変人扱いされました。ところが現在、これだけ多くの方々が心理療法を求めていらっしゃいます。そのことに逆に大きな危機を感じざるを得ません。これは近代化のひずみ、近代的自我の行き詰まりということにどこかで通じる問題であろうということを、日々の臨床の中でも感じています。

そのシンポジウムのなかで出てきた一応の結論というか目標が、当然、今後五年間心理療法をテーマとする研究の課題になると私は考えております。その要点をこれから順番に述べていきます。

まず一点目です。われわれはクライアントさんの前に心理療法家として座るわけですが、そのとき、いかなる存在論的根拠をもって自らを心理療法家と呼べるのでしょうか。この問題は、心理療法というものが一般化していっている現代においてこそ、われわれがもう一度考えていかなければなりません。心理療法は学校臨床、産業カウンセリングや福祉など、さまざまな領域で広がっておりますが、ここで心理療法が何か高みから教示を与えるようなものになってしまってはいけないと私は考えます。そうならないためには、心理療法家の存在論的な根拠ということを、われわれは絶えず考えていかねばなりません。昨年のシンポジウムで明らかになったことは、まず、心理療法家は決して医者のモデルに拠るものではないだろうということでした。医者というのは、患者さんから見たら圧倒的な知識の優位性を持っていて、それを患者さんに教え、処方をします。でも心理療法は決してそのような

方法をとりません。次に、宗教家のモデルというのともまた違うと考えました。宗教家は自分の信じる宗教を皆さんに説いて教えを導きます。心理療法家はそれもしません。さらに、社会改革家のモデルでもないでしょう。われわれは別に社会改革をするために心理療法をやってるわけではありません。

それでは一体何であろうかということをわれわれは突き詰めて考えました。これは今後の大きな研究課題でもありますが、今の段階でいえることをいうなら、それは、心理療法家とは、身体性をも含めた無意識に開かれた存在として存在し得るということです。この存在論的な根拠の問題は、港道先生がなさっているレヴィナスの研究にも重なってくる領域ではないかと考えています。

二点目は言葉の重要性の問題です。われわれは言葉を媒介として心理療法を行います。その言葉にはさまざまな重層的な意味があります。シンポジウムで討論されたことは、心理療法においては言葉だけではなく、言葉も含めたイメージがいかに重要な役割を果たすかということでした。この言葉とイメージの重要性は、個と個の関係性の中で生起してきます。そしてその関係性の在り方というのがいったい何だろうということも、同時にとらえなくてはならないだろうと考えております。

三点目は、そのイメージを追求するときに当然のこととして出てくる、宗教性をも含んだ超越性の問題です。これは加藤清先生が強調されたことですが、われわれが心理療法家をやっていくということは、ひとつの宗教を信ずることではありません。しかし、そこにはやはり宗教的、超越的な契機というものが存在します。われわれはそれを、しっかり見据えていかなければなりません。それはこれまでの自然科学的な精神医学やフロイトの精神分析に、最も欠けていたことです。今後これらの重要性をさらに明らかにしていくのがわれわれの任務ではないかと考えています。この仕事は、現代思想分野の問題と無関係には進められません。また宗教的、超越的なものは、個々の人間を超えた大きな力です。それゆえに大きな危険性もはらみます。われわれは阪神・淡路大震災と同じような時期に体験した、あのオウム真理教のサリンの大事件を知っています。あれは宗教の名のもとになされたとんでもない破壊的行為です。その、本当に紙一重のようなところで、一方でわれわれの仕事は治癒に結びつくような宗教性を帯びていかなければならないと思います。

四点目は、今回のプロジェクを貫くテーマでもある、近代化のひずみの問題です。西洋の近代は、自我を圧倒的優位のものと考えてきました。しかしこの近代的自我は今まさに、危機に瀕しています。われわれは、この近代的自我の在り方を相対化していかなければなりません。そのことを今、突きつけられているのではないでしょうか。先ほどから話題になっているように、グローバリゼーションという言葉が、アメリカ一極支配という形において、あらゆる分野に浸透しております。また戦後効率主義という言葉も出ました。現在、構造改革、行政改革という名のもとに、非常にアメリカ的発想の改革が進んでいっています。これはある意味では、二〇

○一年の「リアリティの変容」シンポジウムのときに鷲田清一さんが強調しておられたような、「人間のたたずまい」――こういうものこそ胸を張って大事にしていかねばならないのでしょうけれども――を崩壊させていく過程ではないでしょうか。これは子育ての問題とも、密接に関係してくる問題です。近代化のなかで豊かなものがどんどん捨てられてきたという過程があります。そして現在、特にバブル経済の崩壊後、三万人以上の自殺者を出すなど、近代的自我でもって突き進んできた企業戦士たちは危機に瀕しています。このような事態を超える価値観がいったいどこにあるのかということを、われわれは問わなくてはならないのではないかと考えます。

五点目は結論になります。これまでのわれわれには、近代化を支えてきたそれなりに共有できる価値観がありました。それが今、崩壊の危機に瀕しております。また、アメリカ一極支配の弊害やイラク戦争など、さまざまな困難に直面しています。かような非常に厳しい状況のなか、今われわれは二一世紀を迎えて三年目に入りました。このなかで多くの人が傷ついて、あるいは自殺したり、あるいは心を病んだりしています。これらがいかにして創造的な治癒に結びつき得るのかということを、われわれは問うていかなければなりません。

昨年、村上春樹は『海辺のカフカ』という作品で一五歳の少年の肖像を描き出して、彼に意識的に近親姦を犯すところまでやらせました。彼はそうすることによって、母とおぼしき人に、いわゆるあの世とこの世の中間から、こちらの世界に送り返されてきます。われわれの集合する世界のありようというのは、バーチャルリアリティも含めて、そこまで関係性が希薄になっており、もう一回近親姦的なイメージを体験しなければ駄目になっているほど、危機に瀕してるのでしょうか。われわれ心理療法家は、カフカ少年をこの世に送り返した母親的存在の女性のようなものなのだろうか、それともカフカ少年と一緒に、この世とあの世の境界まで旅をともにする人間なのだろうかということを、もう一度問うてみる必要があるのではないでしょうか。

このような内容で、次のシンポジウムを考えていきたいと考えています。